

奄美大島北部

あさばなぶし
朝花節

唄・三味線：南 政五郎
相方ハヤシ：中 シゲ千代

詞章 1

* 2 番以降歌詞のみ

ヨーハレ まれまれなきやうがで
(シマイチバンヨ ムライチバンヨイ)
なまうがめばイ いちごろうがむかい

共通語訳

久しぶりあなた方にお会いしました。今お会いしたら、今度はいつ会えるでしょうか。

※「うがむ（拝む）」は会うこと。

詞章 2

ふちゅりよはいぬかせ
やまとやまがわがで ふちゅりよはいぬかせ

共通語訳

吹いてください、南風よ。大和（本土）の山川（地名）まで、吹いてください、南風よ。

※山川は奄美から上ってくるとき、鹿児島本土の入り口にあたる港町でした。

詞章 3

じゅうしちはちにじゅうぬころ
あすでおもしろさ じゅうしちはちにじゅうぬころ

共通語訳

17、8歳、20歳のころです。遊んで面白いのは、
17、8歳、20歳のころです。

詞章 4

いもらんかなまたんよりも
にじゅうさんよまちぬおづきさま まちぬまさり

共通語訳

なかなかやって来ないかな（愛しい人）を待つよりも、
二十三夜待ちのお月様を、待つ方がましです。

※旧暦二十三夜の月の出はとても遅いのですが、この夜の月を祀る行事がかつてよく行われました。

曲目解説

「朝花節」は、特に奄美大島では、唄のある席では必ずといっていいほど最初に歌われる唄です。声慣らしとも、座を清める唄ともいわれ、その歌詞も最初はいいさつから始まります。昔の島唄は、ほとんど複数の人たちによる掛け合い（唄問答）で歌われましたから、この唄の歌詞として、恋唄や教訓歌、世間の出来事を歌った文句がたくさん残っています。

なお、「朝花節」の姉妹歌として、「長朝花節」といわれる曲があります。こちらの方が、「朝花節」の元になった唄と考えられますが、今は、婚礼な

どの格式ばった儀礼の唄として歌われます。どうして、「長」とつくのかと
いいますと、1つの歌詞が反復して歌われ、ただの「朝花節」より長く歌わ
れるからのようです。ちなみに「朝花節」は、短く歌われる「ちゅっきゃり
朝花節」「朝花ちゅっきゃり節」（「ちゅっきゃり」というのは、短い一節と
いう意味）ともいわれます。

最近、唄の席のおしまいころに出てくる「ちゅっきゃり朝花節」とか「別
れ朝花」といわれる曲は、アップテンポ（速めの速度）で歌われますが、こ
の方が「朝花節」の昔風の歌い方といえます。

唄は時代とともに、目まぐるしく変化して生きのびてきました。特に各地
の「朝花節」を聴き比べてみるとそのことが分かります。徳之島の「朝花
節」（本集では「島朝花」として収載）も聞いてください。

なお、この曲の唄者（歌い手）、南政五郎さんは、奄美大島北部を代表す
る唄者として昭和の時代に大活躍した人です。

歌唱者

南 政五郎（みなみ まさごろう）明治33年生まれ。奄美市笠利町佐仁
出身。

い かなぶし
行きゅんにゃ加那節

唄：里 アンナ
相方ハヤシ：当原 ミツヨ
三味線：恵 純雄

詞章 1

* 2 番以降歌詞のみ

いきゅんにゃかな
わきゃくとわすれて
いきゅんにゃかな
うたちやうたちが
いきぐるしゃ
ソラ いきぐるしゃ
(ソラ いきぐるしゃ)

共通語訳

行ってしまうのですか、かな（愛する人）よ。私のことなど忘れて、行ってしまうのですか、かなよ。
発とう発とうとするけれど、行き難いのです。

※「かな」は恋人に限らず、愛する人なら、広い範囲に使われます。

「あいかな」などの「かな」は、人の名前の後につく愛称です。

詞章 2

あしびばよ なきゃわきゃゆらとて あしびばよ
あすばらんどしんきゃぬ うわなりしゅり

共通語訳

遊んだら。あなたたちと私たちが寄り合って遊んだら、遊ぶことのできない友だちは、嫉妬をします。

※「遊ぶ」は奄美では、多く唄を歌って遊ぶことをいいます。

詞章 3

かなやむとな あんまじゅうがむたさん かなやむとな
いちじめかなとや なきわかれ

共通語訳

かな（恋人）を持ちましょう。母や父がすすめるかなを持ちましょう。一時だけの恋人とは、いつか泣き別れをしてしまいますから。

曲目解説

「行きゅんにゃ加那節」は、若い人も含めて奄美大島や喜界島で最も愛唱されている唄といえます。ちょっとした別れのときに、この唄で見送られた人もたくさんいるのではないのでしょうか。

ところで、この唄も最初から「行きゅんにゃ加那節」として奄美にあったわけではありません。

この曲名になる以前は「いゅんめやんめ節」として親しまれていたものでした。「いゅんめ」とは、「魚の目」という意味で、魚の目のようにショボショボした目の兄さんのユーモラスな様子をからかう唄です。いまでも懐かしそうに歌う人はたくさんいます。

なお、それ以前のことを考えますと、本土の数え唄がもとだとも考えられます。それが奄美に入った当時、その数え唄にのせて、いろいろな出来事や、

人物が歌われました。

その証拠に、戦前、宇検村の吉川国彦という人が作ったという「数え唄」をあげておきます。「行きゅんにゃ加那節」と同じ節で歌えることが分ります。()は共通語訳。

ひとつとせ	(一つとせ)
ひんぎていきゅんちゅや	(逃げて行く人は)
まんどしが	(たくさんいるが)
あわれさくていさや	(こんなにも哀れで苦しいのは)
わんちゅりど	(わたし1人でしょう)
ソラわんちゅりど	(わたし1人でしょう)

歌唱者

里 アンナ (さと あんな) 昭和54年生まれ。奄美市笠利町須野出身。

かんつめ

唄：山田 武丸
相方ハヤシ・三味線：森田 照史

詞章 1

エーイ ゆべがれあしだる
かんつめあごくわ
ヤイリー なあしゃがよねなりばイ
（よねなりばイ）
ごしょうがみちにみすでふりゅり
ヤイリー なあしゃがよねなりばイ
（スラヨイヨーイ）
ごしょうがみちにみすでふりゅり
アワレサクティサヤ カンツメアゴクウイ

共通語訳

夕べまで一緒に遊んだ、かんつめ姉さんは、明日の宵になれば、後生（あの世）への道に御袖を振って逝くのです。

※「遊ぶ」は唄遊びのことで、恋人の岩太郎とともに唄を歌い合ったことをいっています。

※おしまいのハヤシコトバは「哀れで辛い思いをしたのが、かんつめ姉さん」という意味。

曲目解説

悲しい唄の代表としてよく知られた唄です。ここに出てくる悲劇の女性「かんつめ」の伝説は、オペラにもなって紹介されたことがあります。

奄美が薩摩藩に治められていた時代（奄美では薩摩世といいます）、ヤンチュ（家人）制度がありました。金持ちの農家が、お金で身を縛り、奉公人として働かせるというもので、その奉公人がヤンチュといわれたのです。

かんつめもヤンチュの1人で、ある村の農家を買われてきた娘でした。そのかんつめは、唄が得意で、あるとき隣村の役所の書記であった岩太郎といわれる青年と唄を歌い合う機会がありました。たちまち2人は意気投合し、やがて夜になると山の中の小さな小屋で唄を歌い合うようになります。面白くないのは、雇う側の主人夫婦と、同じヤンチュ仲間でした。特に雇い主は、いつかかんつめを、自分の側女（そばめ）にしようという気持ちもあったようです。奥さんもそのことに気づいていました。そのため、かんつめは、何かにつけ周囲の人たちからいじめを受けたのでした。いつかは岩太郎と一緒にになりたいと思っていたものの、それは叶わないとあきらめ、とうとういつも会っていた小屋で、自ら命を絶ったのでした。（そんなにいじめられなかった、という話も伝わっており、真実は分かりません。）

この悲劇を宇検村のある人が歌詞にして、かんつめがいつも得意にしていた仕事唄の「草薙（くさな）ぎ唄」につけて歌い始めたと言います。奄美の島唄のもとをたどっていきますと、かなりの曲が仕事唄（イトといわれます）に行きつくのですが、「かんつめ」もその1つということになります。今日よく歌われる仕事唄の「飯米（はんめ）取り節」を聞きますと、節回しがよく似ていることに気づきます。

仕事唄ですから、はじめはそんなに悲しさを感じる唄ではありませんでした。やがて人々が、唄の登場人物に感情移入をし、だんだん悲しい唄にしたいきさつがよく分かる唄です。

歌唱者

山田 武丸（やまだ たけまる）大正5年生まれ。龍郷町秋名出身。

まんこい
マンコイ

唄・三味線：築地 俊造
相方ハヤシ：山田 トシ

詞章 1

みなとぐちがれや
 ヨーイマンコーイ
 かなにうくりられて
 ヨーマンコイ トサマンコイ
 (ヤーソレマンコーイ トーサマンコイ)
 となかぬりじゃせば
 ヨーイマンコイ
 しゅかぜマイタイたのも
 ヨーマンコイ トサマンコイ
 (ヤーソレマンコイ トサマンコイ)
 となかぬりじゃせば
 ヨーイマンコイ
 しゅかぜマイタイたのも
 ヨーマンコイ トサマンコイ

共通語訳

港口までは、かな（愛しい人）に送られて、渡中（海）に乗り出せば、あとは潮風を頼りにします。

曲目解説

「マンコイ」というのはこの唄のハヤシコトバからきた言葉ですが、意味はいろいろな説があって、確定はしません。その1つは「招く」という意味

だということ。奄美市笠利町に伝わる民俗芸能「節田マンカイ」や、龍郷町の秋名で、旧暦八月に行われる浜辺の行事「平瀬マンカイ」などの「マンカイ」につながるものではないか、というものです。

もう1つは、男女が仲良くなることを意味するという説で、そうした人は「マンコイ」に「満恋」という字を当てたりします。

ところで、沖縄の首里王府が18世紀に編纂した唄本に「琉歌百控」というものがありますが、このなかに奄美大島の「満恋節」が入っています。おそらく、この「マンコイ」であったと推定されるのですが、いずれにせよ由緒ある唄であることが分かります。

なお、この唄は、築地俊造さんが昭和54年、日本民謡大賞（日本テレビ系列）でグランプリを受け、民謡日本一になったときの曲です。この民謡大賞には、その後2人の優勝者が奄美から出るのですが、現在島唄が、全国区になったそのきっかけを作ってくれた唄とってよいのではないのでしょうか。

歌唱者

築地 俊造（つきじ しゅんぞう）昭和9年生まれ。奄美市笠利町川上出身。

やちゃ坊節^{ぼうぶし}

唄：当原 ミツヨ
相方ハヤシ・三味線：池田 嘉成

詞章 1

ハレーーやちゃぼうちばやちゃぼうヤー
ハレーむぞイヨイな
（スラヨイサヌヨーイヨイー）
むぞなまーれヨーイヤちゃぼうヤー
ハレーむぞイヨイな
（スラヨイサヌヨーイヨイー）
むぞなまーれヨーイヤちゃぼう ヤーレイー
（むぞなまーれイヤーやちゃぼうヤイレイー）
やちゃぼうきもちゃげさヨー
ハレー やまイヨイーぬ
（スラヨイサヌヨーイヨイー）
やまぬすみかヨ
ハレーやまイヨイーぬ
（スラヨイサヌヨーイヨイー）
やまぬすみかヤーレイー

共通語訳

やちゃ坊といえは、やちゃ坊。可哀そうなやちゃ坊。
やちゃ坊は可哀そうに、山が住みかなのです。

※「やちゃ」はあだ名。「坊」は愛称。

※「むぞな」「きもちゃげ」はともに「可哀そう」とい

う意味と、「かわいい」という意味も含んでいます。

曲目解説

「やっちゃ坊」とは、奄美大島、喜界島ではほとんどの人が知っている伝説上の人物です。しかし、彼が実在の人であったのか、想像上の人物であったのかは、残念ながら分かっていません。

昭和8年に発行され、今も島唄の教科書というべき、文（かざり）潮光著『奄美大島民謡大観』には、やっちゃ坊（野茶坊と当て字されています）は山育ちで、昼間は里に下りて散々悪さをし、集落の人たちが「やっちゃ坊狩り」をするくらいなのですが、人々は不思議と彼を憎まず、むしろ同情的であったと書いています。今でもやっちゃ坊のような人といえ、野性的でありながら、無欲で弱いものの味方になるような人を指しているようです。

ところで、この曲ですが、奄美大島では、「きもちゃげ」（可哀そう）の部分が強調されて静かに歌われるのに対して、喜界島ではかつて、賑やかな踊り唄として歌われていたようです。

奄美大島南部のいくつかの集落では、お正月などの祝い唄として歌われたようです。

当原ミツヨさんは、この唄を歌って第12回日本民謡大賞（日本テレビ系列、平成元年）で日本一になりました。

歌唱者

当原 ミツヨ（とうはら みつよ）昭和18年生まれ。奄美市笠利町笠利出身。

ろくちょう やんばる
六調～山原

唄・三味線：前田 和郎
相方ハヤシ：平 博雄

唄：福 タミ
太鼓：中野 満秋

〈六 調〉

詞章 1

* 2 番以降 16 番まで歌詞のみ

ごめんくだされー
こよいのしゃみをー
なきゃがおいわい
うたいましょー ヨイヤナー

共通語訳

以下 16 番まで、本土系歌詞のため訳略

- ※ 「しゃみ」は三味線のこと
- ※ 「なきゃ」は「あなたがた」の意味。

詞章 2

おどりするなら はよでてうどれ
おどりおそなて おどららぬ

共通語訳

訳略

- ※ 「おそなて」は「遅くなって」の意味。

詞章 3

うたをうたいましょ はばかりながら
うたのあやまり ごめんなされ

共通語訳

訳略

詞章 4

おろしよめでたの わかまつさまよ
えだもさかえる はもしげる

共通語訳

訳略

詞章 5

たいこうたしゅて よこからみれば
さまのたいこなら しゃみいらぬ

共通語訳

訳略

詞章 6

せんりょうまんりょうの かねにはほれぬ
わしはあなたの きにほれる

共通語訳

訳略

詞章 7

ここはしげとみ こゆればよしの
よしのこゆれば かごのしま

共通語訳

訳略

※「しげとみ」「よしの」「かごのしま」はそれぞれ鹿児島本土の「重富」「吉野」「鹿児島」のこと。

詞章 8

あなたひやくまで わしゃくじゅうくまで
ともにしらがの はゆるまで

共通語訳

訳略

詞章 9

めでためでの わかまつさまよ
えだもさかえる はもしげる

共通語訳

訳略

詞章 10

たいこうたしゅて よこからみれば
 あなたたいこなら なんもいらぬ

共通語訳

訳略

詞章 11

ながいかたなは さしようがござる
 うしろさがれば まえあがる

共通語訳

訳略

詞章 12

しまにくだれば たびくでくだれ
 しまやあらいし こいしばら

共通語訳

訳略

※「たびくで」は「足袋をはいて」のこと。

詞章 13

すいたおかたは せんりもさきに
いやなおかたが めのまえに

共通語訳

訳略

詞章 14

ばしゃにのるかよ じりきにのるか
おなじかねなら ばしゃにのる

共通語訳

訳略

※「じりき」は「人力車」のこと。

詞章 15

おどりするなら はよでておどれ
おどりおそなて おどららぬ

共通語訳

訳略（2番と同じ）

詞章 16

いまのおどりは おどりこがそろった
おどりならわば いまならお

共通語訳

訳略

〈山 原〉

詞章 17

* 18 番以降歌詞のみ

エーエーやんばらの一ならい
 あだなねばぬむしろイヤー
 しかまよねーいしゅて
 しゅうみしゅみー

共通語訳

山原（地名）の習慣に習って、あだなねば（アダンの葉）の筵（むしろ）を作り、朝晩それに座って、海の潮の様子（干満）をみましょう。

詞章 18

あさやあさがおに みずくみゆるうなぐ
 いろやしろじろと まくるかしら

共通語訳

朝に朝顔に、水を汲んであげる女性がいます。色は白々と
 していて、真黒な髪の頭です。

詞章 19

きゅうがりぬあそび あしゃがれぬあそび
 いきはてぬあそび やねぬあそび

共通語訳

今日までの遊び。明日までの遊び。おしまいにやってくる遊び。あとは来年の遊びです。

※この「遊び」は単なる遊戯ではなく、儀礼的な神遊びのニュアンスが含まれています。

詞章 20

あしびずきわぬや とめてとめららぬ
しまぬしりぐちじ とめてあしぼ

共通語訳

唄遊びが好きな私は、とめてもとめられません。島の尻口（はずれ）まで、探しに行って唄遊びをしましょう。

詞章 21

なきゃがするうたや わがみにやいらぬ
さもちとりわけて ききゃしたぼれ

共通語訳

あなた方が歌う唄は、私の耳には入りません。さもち（未詳語）とりわけて、聴かせてください。

詞章 22

いきよいきよにしりば あとむちゃさやすが
うろうろにすりば わぬやきゃすり

共通語訳

行こう行こうとすれば、あとに迷いが残ります。居よう居よう
とすれば、私はどうしましょう。

※下の句の部分は、「義理がたたない」という意味の文句がよく歌われます。

詞章 23

おしたててきよらさ おしのとりむどり
まえたててきよらさ じきのうなり

共通語訳

押し立ててきれいなのは、鴛鴦（おしどり）の踊りです。
より勝ってきれいなのは、すぐ上のうなり（姉妹）です。

詞章 24

なうたあらしゃげて わうたあらしゃげろ
たがいにあらしゃげて よさりあしぼ

共通語訳

あなたの唄を盛り上げて、私の唄を盛り上げましょう。互いに盛り上げて、夜通し遊びましょう。

※「あらしゃげる」には、「盛り上げる」という意味と、唄の速度を速める意味もあります。

詞章 25

いきよいきよにすりば あとむちゃさやすが
うろうろにすりば わぬやきゃすり

共通語訳

訳略（歌詞 22 番と同じ）

詞章 26

おもてさえおれば あとさきどうなりゆる
せつやみずぐるま めぐりあゆり

共通語訳

思ってさえいれば、後先成就します。時節は水車の（水と車の）ように、いつかは巡り会うものです。

詞章 27

おぼこれどやよろ かふしゃれどやよろ
やねのいねがなし あぶしまくら

共通語訳

ありがとうございました。果報（幸せ）なことでした。来年の稲がなし（美称）は、畦が枕になるほど豊作です。

※「八月踊り」でよく歌われる歌詞。1軒1軒、家を回って踊るところでは、その家で歓待されたお礼の意味も持ちます。

※「あぶしまくら」は、あぶし（田の畦）が、風になびく稲穂の枕になるような状態をいい、豊作を意味します。

詞章 28

おぼこれどなりゆる かみさまぬやどおりゆる
やよえあぶし あぶしまくら

共通語訳

ありがとうございました。神様が宿りなさる、やよえ（意味不詳）畦。畦が稲穂の枕になるくらいの豊作だ。

※3句目「やよえあぶし」は、本来8音ですが一部欠落したものと思われます。「やよえ」は「家祝い」ともとれますが、はっきりしません。

曲目解説

この唄は手踊りに付く唄で、「六調」から「山原」まで、続けて歌い踊られます。普通は、「六調」だけで終わります。

今や奄美の六調といえは、日本中に知れ渡るようになりました。しかしながら、この唄のもとをたどりますと、江戸時代に、日本中に流行った「ヨイヤナー」という唄に行き着きます。この唄にも、「ヨイヤナー」というハヤシコトバが歌われますし、唄の文句も7775調の本土系の歌詞であることが分かります。

「六調」という曲名も、本土ですでに付いていて、そのいわれははっきりしないのですが、奄美には鹿児島島の「六調子」が入ったのではないかと想像されます。

「山原」は、沖縄本島北部の地域一帯をこういいますが、曲も沖縄から来たものであることは確かです。奄美は、かつて首里王朝の支配下にあった時

代がありますから、文化的にはよく似ています。歌詞も八月踊りで歌われたものが使われています。「六調」にせよ、「山原」にせよ、他の地域から来た唄であることでは共通なのですが、踊り唄はしみじみ歌い合う島唄とは違いますから、このように外来の珍しい曲が選ばれたのだと思います。

今は、言葉の上では本土や沖縄の感じがあっても、曲は、特にテンポやリズムの上で、すっかり奄美の唄になっています。

歌唱者

前田 和郎（まえだ かずろう）昭和15年生まれ。奄美市笠利町佐仁出身。

福 タミ（ふく たみ）昭和5年生まれ。奄美市笠利町佐仁出身。